

會



報

1950年5月

150

日本山岳會

會報の重要性

會報が誕生したのは昭和五年十月で、早いものでもう二十年になる。その年の七月に本會理事に選任された浦松佐美太郎君が、九月の常例理事會の席上で、當時本會の刊行物としての機關誌「山岳」が年三回あるばかりで、これでは會と會員との連絡にも不十分であるし、會員の會に對する關心を喚起するためにも何か別にもつと頻繁に會員の手許に届くものを出さすべきたと提案し、浦松君が一切をイヤ應なしに押付けられ早速翌月から始まつたのである。

一號から五〇號、五一號から百號と二冊に合本された會報を取出して綴綴すると、時間のたつのも忘れるほど興味が深いばかりでなく、會報の果してきた役目の大きかつたことを感ずる。こんど百五十號を迎へてまた合本が一冊ふえる譯だが、この際發行者浦松君の創意と最初の苦心は高く評價されるべきだと思ふ。

會と會員との連絡に主眼を置いて創刊されたものではあるが、會の長老小島、武田、高野、木暮といった大先輩はじめ會員諸氏の滋味豊かな隨筆隨想も載つてゐるし、なんの氣兼ねもない活潑な意見や論争が賑やかだつたこともあり、その點では會員の談話室のやうな役もしてゐた。國內登山界のうつり變りも海外登山界の登勢もよく傳へられてゐる。研究資料もそのとき々の話題を取上げて熱心なまた貴重な寄稿がみられる。

山岳文獻についても内外の書評紹介や、購入寄贈書目で會報創刊以後の新聞は勿論、古典のかずか

ずも收載されて、いまになつてゐると非常に便利である。會員通信などの中には軽い旅信もあるが、また登録記録として登山史に摘録されるべきものも含んでゐるであらう。

もなし、國民體育大會登山部門の世話役が主な仕事でもない。あくまで登山者のクラブであつて、クラブとしてしつくりとした強い性格をもつことさへ出来れば、養成も講習も世話役もろくに勤まるのだ。そのクラブをまとめてゆくのに「會報」の占める役割は小さくないといふことをクドイやうだが繰返して言つておきたい。

(藤島敏男)

第4回 ウェストン祭

日 時 七月九日—十三日
出 發 八日午後十時新宿發準急
九日 松本—上河内
行 事 1. 記念祭(ウェストン像前)
2. 講演・キャンプファイヤー・座談會など
講習會 十日—十三日 於穂高湖澤
山 行 穂高・槍その他の縦走班
費用概算 1600圓(含新宿松本上河内間往復車賃・上河内一泊・宿泊料その他割引)外に參加金一人 100 圓
注 意 參加希望の方は至急本會宛申込のこと・詳細を通知します。

本年度會費御納入下さい

(詳細は四頁御参照のこと)

新名譽會員

會は四月十九日の役員總會に於て長老會員十餘名の候補者中から三枝守博・島山梯成・加賀正太郎・中村清太郎・田部重治・近藤茂吉・横有恒の七氏を名譽會員に推薦した。よつて會の名譽會員は現在の高頭仁兵衛・高野鷹藏・武田久吉・山川默の四氏(何れも發起人)に加へ十一名となつた。

●島山梯成氏

一九〇六年五月入會・一九二三年五月幹事となり後評議員を兼ねる・一九三四年一月から一九四六年六月まで理事。この間また評議員たりしことあり。二三年の長年

●三枝守博(舊名威之介)氏
一九〇六年三月入會・一九一〇年幹事・一九一九年六月から一九四一年二月まで評議員。三二年の長年月會の役員として會務に貢献され、「山岳」四年一號・五年一號・六年一號・七年二號に重要な紀行を發表された外初期の同誌に貴重な寫眞を残した。

(主なる山歴)

一九〇七年八月槍ヶ岳・一九〇八年七月白馬岳から五龍岳までの後立山縦走・一九〇九年七月小島氏等と惡澤岳魚無河内西河内を経て赤石岳に達する記録的な登山に成功・同年八月五龍から鹿島槍をきはめた・一九一〇年七月辻本氏等と爺岳に登り鹿島槍を往復し針ノ木峠迄の後立山縦走を完成・更に中村氏と藥師・双六・槍ヶ岳の縦走をなし神河内へ下つた・一九一一年七月加賀氏と大町から針ノ木峠を越え立山をきはめ劍岳を試みたが天候不良のため果さなかつた。

月役員として會務に盡され、特に多年會の財政方面を擔當された。氏は會の母體とも云ふべき日本博物學同志會の會員として發起人にはならなかつたが創立當時から本會と深い關係をもたれ、また會が社團法人改組に際してはとりわけ盡力された。

(主なる山歴)

一九〇七年武田、梅澤、河田の諸氏と甲斐駒ヶ岳に登り同山が白崩山と同一なることを確めた。
●加賀正太郎氏
一九〇八年五月入會・一九三五年十月から一九四一年二月まで評議員であつた。

(主なる山歴)

一九一〇年八月歐洲アルプスに遊びユングフラウ登山・マッターホルンの裾を半周して同名の水河を下り、ブルイユに泊しアオスタの谷を訪れサン・ベルナル峠を越えてスキスに入る。「山岳」六年一號に收載された同氏の「歐洲アルプス越え」は邦人登山家の初めてスキス・アルプスを訪れた紀行として甚だ貴重なものであつた。
一九一一年七月三枝氏と共に針ノ木峠を越え立山に至り同氏と別れ五色原から藥師岳・三俣蓮華・槍ヶ岳への縦走をなし神河内に下つた。

●中村清太郎氏

一九〇八年五月入會・一九一〇年幹事・一九一九年から一九四六年六月まで評議員(當初幹事兼任)三六年度の長年月に亘り役員として會に盡された。山岳に寄稿されたものも極めて多くそれらは後年『山岳渴仰』にまとめられた。氏は又山岳畫家としても夙に令名を馳せ、その作品の多くは「山岳」

を飾り、又その装幀等で同氏の手になつたものも少くない。

(主なる山歴)

一九〇八年夏奥常念岳・一九〇九年七月小島氏等と惡澤岳・赤石岳の記録的登山・八月惡澤岳・一九一〇年七月三枝氏等と共に後立山縦走後藥師から槍ヶ岳・更に辻村氏と霞澤岳・同十二月武尊山・一九一一年十二月大井川田代から大崩山に登り三尺峠を越え梅ヶ島温泉から更に旅ヶ岳に登る・一九一二年四月田部氏と飛龍及大菩薩・同七月南より光岳に登りイザルケ岳・上河内・聖岳を経て赤石岳に達する記録的登山・同十一月唐松尾・牛王院から雲取山・一九一三年五月金峰山から雁坂峠・同七月立山温泉から五色原へ至つて滞在・槍ヶ岳から來りし木暮、田部氏らと立山・劍岳に登る(別山尾根からの初登攀)・一九一五年五月初めに笛吹川に入る・同年夏黒部川に入り大蓮華・五龍に登つた外黒部の谷から大窓の雪溪に登り大窓に達す(初登)。

●田部重治(舊姓南日)氏

一九〇九年十二月入會・一九一九年六月から一九四六年六月まで評議員(當初幹事兼任)。前後二七年の長き間役員として會に貢獻された。またその流麗な文章は「山岳」の諸號を飾り後「山と溪谷」にまとめられて多くの讀者をもつた。その他山に關する著書が少なくない。氏はまた多年法政大學山岳部長として後進を指導された。

(主なる山歴)

一九〇九年五月木暮氏と景信山から三頭山まで縦走・一九〇九年七月早月川から立山・同年有峰から藥師岳・同十月木暮氏と甲武信、三寶、金峰縦走・一九一〇年

七月有峰から藥師、立山温泉から奥大日岳、立山、針ノ木越、白馬岳・同八月片貝川アブリ谷から毛勝山・一九一一年七月高瀬川から鳥帽子岳、黒部五郎、黒岳、赤牛岳、東澤、黒部川、平、ザラ峠を越え立山温泉・一九一二年四月中村氏と飛龍大菩薩・同七月木暮氏と雁坂から甲武信・同十一月中村木暮氏らと唐松尾、牛王院、飛龍、雲取へ縦走、一九一三年中村木暮氏と金峰雁坂縦走・同年夏木暮氏と槍ヶ岳から日本海迄の大縦走・一九一五年五月木暮・中村氏と笛吹川を渡る・同七月木暮氏と毛勝、猫又を越え、三ノ窓の頭から初めて劍岳に登り立山、黒部を越え赤牛岳にとりつき黒岳、野口五郎を経て高瀬川に下る記録的登山・一九一六年五月木暮氏と笛吹川から甲武信岳に登り眞ノ澤を下る・一九一七年五月木暮氏と笛吹川釜澤から甲武信岳に登る(初登)・同七月木暮氏と共に北又谷から朝日雪山に登り白馬を経て針ノ木峠まで縦走・一九一八年柳澤峠、將監峠、大洞川。

●近藤茂吉氏

一九一〇年十二月入會・一九一七年幹事・一九一九年から一九四一年二月まで評議員。二三年の長きに亘り役員として會に貢獻された。一九一四年六月日滯英中の辻村伊助氏と共に正賓として英國山岳會の晩餐會に招待された。同日列席者中にはマム、ウオラストン、コリー、ロングスタッフ、スペンサー等錚々たる登山家があつた。氏はまた同六月二十三日英國山岳會の Informal meeting に於て日本アルプスにつき幻燈講演を行つた。

(主なる山歴)

一九一二年七月高野藏藏氏と富山側から立山に登り平から針ノ木峠を越え大町にて高野氏と別れ、神河内から穂高槍の縦走に成功した。(初めての逆縦走ならむ)・一九一三年長次郎、平藏と共に長次郎谷から劍岳をきき平藏と二人で別山尾根を下る(初通過)。この時長次郎は初めて平藏谷を下つたが近藤氏は平藏のためかく命名した。更に五色原に至つて中村氏と奥木挽に登り、藥師、黒部五郎と華華へ縦走した。一九一四年五月スコットランド山地紀行・同年八月スキスアルプスに入り辻村伊助氏とシュレックホルンに登り雪崩のため遭難した事情は「スウィス日記」に詳し。

●榎 有恒氏

一九一四年二月入會・一九二二—一九三〇年幹事・一九三一—一九三三年理事。この間また副會長に推薦された。一九三三—一九四一年評議員・一九四一—一九四四年法人改組後理事、再度副會長に推薦され、一九四四年木暮會長逝去されるや會長に推されたが一九四六年辭任する。一九五〇年評議員。多年役員として會に残された足跡は極めて大きくまた慶應大學山岳部の大先輩として後進の指導に盡された業績は枚舉に遑ない。氏はまた邦人では初めて英國山岳會の會員に選ばれた。唯一の著書『山行』は本邦の山岳古典として今更後説の要もなからう。

(主なる山歴)

一九二〇年ヴェンターホルン・メンヒよりアイガーへの縦走・フインスターアルホルンよりグロツセシュレックホルン・一九二一年モントローザ・マッターホルン・アレッチホルン・アイガー東山

棧初登攀・一九二二年三月槍ヶ岳・一九二三年一月立山彌陀ヶ原にて板倉勝賢氏を失ふ・一九二五年マウント・アルバーターの初登頂。

× ×

創立四十五年を迎へた本會の歩んだ路は必ずしも坦々たるものではなかつた。會のルームが焼かれたのうづらな時に、あらゆる困難を押しきつて先づルームを再建し會員の據り所がつくられたことは、勿論當時の役員と努力と相俟つて會員其他の協力の賜物ではあつたが、然しわれわれの先輩が立派な傳統を遺し、その無言の力が直接間接働かした事實がなかつたら、果してあのやうに早く立ち直りをみせたかどうか疑問であつたらう。ルーム再興に際してこのやうな感を持つた會員は決して少くなかつたと信ずる。

時代が移るに従ひ新しい世代の會員が次々に會を擔つてゆくであらうが、われわれの良き先輩が遺された傳統を省み、上下の結びつきを堅くしつゝ將來の飛躍に向ふことを當代の會員に課せられた任務ではあるまいか。新名譽會員となられた長老諸氏もどうか健康に恵まれ、未永く會のためはることなき助力を加へられるやう、この機會に祈念して已まない。(T・M)

★木暮理太郎氏を偲ぶ會

今年には木暮さんの七回忌にあたるので五月六日ルームに於て故人と親しかつた會員有志二十餘名が夫人令嬢を圍み、晩餐を共にしつゝ憶ひ出を語り合つた。尙同タ故人愛蔵の「Ruins of Desert car they」二巻が會に寄贈された。

一

白樺の林に入れば
白樺は白く冴えたり
白樺の梢は透きて
うすき陽に白く光れり

二

白樺の林に入りて
白樺の姿を見たり
白樺の肌はちち色
水宮の珊瑚に似たり

三

白樺の木立は直く
白樺の木立は細し
白樺の林の中に
細き徑かすかに通う

四

白樺の林歩めば
白樺に白き影あり
白樺の林歩めば
白樺に青き影あり

五

訪いの人も絶えたり
音もなく林は立てり
若葉のみどりに萌えて
黒き土ほのか匂いぬ

六

白樺の林に立てば
白樺の梢は高し
木がくれに空ははるけく
流るるは青き風のみ

七

白樺の林を越えて
白き峯遠く輝き
白樺の林の奥に
白き小屋靜かに立てり

八

白樺の小屋に憩いて
切口の白き木を焚く
白樺は水を含みて
煙立てゆるく燃えたり

白 樺

伊藤秀五郎

九

白樺の林の朝は
白き霧淡くたどい
青き鳥梢わたりて
青き影いよいよ青し

十

白樺に雨のかかれば
幹濡れて青く光れり
白樺に風のあたれば
枝鳴りて谷にこだます

十一

白樺の林の中に
枯れし木の白く浮べり
いつの日に枯れし若木か
肌はなお生けるがとし

十二

白樺の林の中にも
二つ三つ枯れし木はあり
誰のつけし古き傷かや
あわれあれいつの日に消ゆ

十三

白樺の林を行けば
岩かげに雪は残り
春淺き日かげ斑に
谷窪に寒く残り

十四

白樺の林の中の
一すじの細みち黒し
白樺の林の路は
墨色にしめりて淋し

十五

白樺の林を出でて
白樺の姿想えり
白樺の林を去りて
白樺の心を知りぬ

圖書室からの報告

圖書室落成の一週年も過ぎた。故小島老の記念展覽會ももう一年前のことになった。この一年間にこのルームを訪れた人々のこと、こゝに催された集りの数々、書籍や繪畫や調度や再建資金を寄せられた人々の好意、それらのことを思ひめぐらすと多少の感慨なきにしもあらずである。

増築したい慾もあるが、さう大望を抱いても實現容易でないから當分はルーム本来の目的に重點を置いて圖書の充實整備に専念したいと思ふ。そこで從來「圖書室再建資金」として募集してきたのを今後は「圖書基金」と名目を變へることとした。然し會員諸兄並びに同好諸士の御厚意に俟つところは尙多々あるので、これからも基金はもとより書籍雜誌會報部報の類の御寄贈を大いに期待し且つお願いしたいのである。海外諸國の山岳會との連絡もぼつ／＼回復の氣運が向いて來た。會員諸兄がもつとこのルームに關心を持たれることを切望してやまない。

(T・F)

寄附者芳名

五千圓 本會山陰支部 二千圓 森田勝彦 一千圓 近藤茂吉 津田周二 五百圓 松本善二 故松廣新 四百圓 西川 博 三百圓 畠中善哉 二百圓 藤島源太郎 百圓 松本志郎

小計

一、〇〇〇圓
累計 七〇六、四一五圓
總支出 六八八、五六五圓
差引殘 一七、八五〇圓

右の殘高を「圖書基金」に繰入

諾威隊のヒマラヤ遠征

昨夏チットラル地方のテイリツヒ・ミール山に偵察を行つた諾威山岳會のヒマラヤ遠征も本年に入つてから諾威地學協會と共同して着々準備を進め三月末には裝備、食糧等が荷造されて印度に向け發送され、隊員も大體人選を終つた。

隊長、アルネ・ネス教授、隊員フリットヨブ・ローレンツ・エン博士、ハンス・エツチ・ブウゲ、パー・クベルンベルグ、ヘンリー・ベルグ氏、外に科學者二名追加の見込である。

尙海外遠征の経験者は隊長のネス教授とクベルンベルグ兩氏だけである。(栗飯原健三)

★ ★ ★ ★ ★

會員名簿を作成しますから至急豫約御申込を願います

終戦後長いこと會員名簿の作成がおくれてゐたが、この程印刷に付し得る迄に整備が出来たので一日も早く會員各位の手許に届けたいと思ひます。就ては左記實費を御送金の上至急豫約申込を願います。

一部 百圓 (送料會負擔)

●豫約部数が五〇〇にみたぬ場合は中止するかもしれません。
●經費の關係で豫約部数しか印刷しないから豫約者以外は入手不可能です。
●本年度の會費と共に御送金下さい。

●豫約申込締切

七月末日限り

本年度會費

昭和廿五年度會費は、左の通り決定した。入會金は従前通り。

●會費年額（全會員共通、團體及個人共）

三〇〇圓（基本額一五〇圓従前通
山 岳一五〇圓新
規
東京支部（團體及個人共）

五〇〇圓（基本額一五〇圓
山 岳一五〇圓
從前
維持費一〇〇圓）

地方支部
三〇〇圓に各支部費を加えた額

●入會金
個人三〇〇圓（含正章代）従前通
團體一〇〇〇圓（同 右）

團體員個人登録手数料二〇圓
右の内譯によつて判るごとく、
實質的には、會費は昨年度と同じであつて、「山岳」一冊分の代金が増加したのである。

周知の通り、「山岳」は會の機關誌として、會の生命であり、會を象徴し、四十餘年の傳統を保ち歴史を築き上げたのである。以前は會費を納めれば、山岳が二冊送られてきたものであるし、そうすることが本當だと思う。こんど、一冊だけ含めて昔の姿に直さうというのである。各位の御諒承と、機關誌に對する愛情による御協力を切望する。

× × ×

昭和廿五年度
會員總會

三月廿五日午後 於交通博物館
大 會 第 一 次

開 會 の 辭 堀 田 理 事
廿四年度事業報告並
廿五年度行事豫定 松方理事長
廿四年度會計報告 谷口 理事
廿五年度會費増額並 望月 理事
豫算審議

役員改選の件
支 部 報 告 各支部代表
會 報 辭 塚本閣治氏
映 畫 出席者百五十名（委任出席者五
三十七名）、各議事は異議なく可決
された。左に概要を記する。

●廿四年度事業報告
○事務專任者就任 三月十日事務
室兼圖書落成と同時に、會員原
全教が入居し建物の管理をするこ
ととなり、次で主事に任ぜられて
福井主事より事務を引きつぎ、超え
て六月三日菅原美與子を新規採用
し、事務に専任することとなり、
福井は主事辭任後も全面的協力を
惜まず、茲に常任事務は着々と進
捗するようになった。

○ウェストン祭 六月九、十兩日
上河内に於て、東京及各地會員約
八十名参加して盛大に行はれ、續
いて、四班に分れて應高・槍・笠
などへ山行した。

○第四回國民體育大會富士登山
役員及参加者約三百名、十月卅日
十一月三日に亘り無事終了した。
之と平行して公開登山三班を編成
しそれと甲斐駒、金峯、瑞牆、
大菩薩へ登行した。

○小集會 實施は東京支部へ委任
し、五月十九日第一〇九回より三

月十六日第一一九回まで十一回開
催（詳細は東京支部報告に譲る）
○講師或は指導員派遣
六月 山梨支部主催高校生講習
關根・原
八月 甲府南嶺會總會講演 堀
田
八月 應高潤澤に於ける、岡山
縣玉野高校女子部の合宿 川森・
新村・網藏・吉田
八月 山陰支部主催講演及映畫
原
十月 於茅倉尾根岩登講習 原
・中里
十一月 於富士山、高校岳通
崎田
十二月 廣島山岳會及山陰支部
原
廿五年一月 於霧ガ峯、山梨支
部スキー講習 林・藤井・中里
○記念ビッケル寄贈 十二月アメ
リカ山岳會オールド・エイヤー
ズ兩氏よりアルバータ登山記念、
スイス製、銀仕上ビッケルの寄贈
を受けた。

○外國山岳會との連絡 アメリカ
山岳會・カナダ山岳會をはじめ歐
米各山岳會との連絡が開始される
ようになった。

○出版事務
一、山岳 四四年一號—十月、
同二號—十二月各刊行。
二、山日記 十五輯（一九五〇
年版）十一月發行。

三、會報 一四四—一四九號五
回發行。頁數・紙質・體裁共に、
戦前に復しつゝあり。

四、山 七月以降毎月、明文堂
から刊行、市販となる（河出書房
は五月で打ち切）。

○支部狀勢 本會支部は順調に發
展し各地に設立され、現状左の通
り。

× × ×

東京・關西・越後・福島・山形
・靜岡・信濃・富山・石川・山梨
・山陰・北海道（十二支部）
設立準備中或は計畫あるもの
兵庫・岐阜・群馬・北九州・鹿
兒島・神奈川・宮城

○會員狀勢（廿五年三月廿二日調）
一、會員番號 三七五三號
二、會員現在數 二七二二名
内 譯

廿四年度迄會費納入一〇七〇人
その他連絡ある者 五四〇人
廿四年三月以降連絡なき者
四〇〇人

通信に對し返信なき者五〇〇人
住所生死不明の者 二〇二人
三、廿四年入會者 五五九名
（手續のみ本年度にした者を
含む）

四、退會者 八〇人
（正式届出及支部若は所屬團
體よりの通知による）

五、物故者 二六人
（同右）

○圖書室利用狀況（署名簿による）
一、來室者 三月（下旬開室）
六三人、四月三五〇人、五月三三
〇人、六月四二九人、七月四六五
八人、八月二四四人、九月二七四
十月四〇八人、十一月三五二八
十二月二九八人、三月（廿三日迄）
一八二八人、計三八三〇人、平均一
日一〇・五人。

會員來室者の種別は、圖書閱覽
者、岳友間の親睦、無目的訪問
者、岳友間宿泊會費納入、出版物購
入、用具、山行相談、所屬團體會
合、團體參加者、支部役員の事務
連絡、役員會出席等多岐に亘り、
夏山及スキーシーズン中は減少の
傾向にある。

なお、會員外岳人の入會申込・

訪問・相談・新聞及雜誌記者、圖
書館經營者、用品商、出版關係
者、印刷、製本、寫眞等業者、官
公廳員、地方學校見學者などを合
せて實際の來室者一日平均一五
二〇人と見て、總數六七一〇〇
人に達する見込。

二、集會
月 別 會主催 會以外 計
三月 一〇 一〇 一〇
四月 一五 一五 一五
五月 一三 一三 一三
六月 一〇 一〇 一〇
七月 一〇 一〇 一〇
八月 一〇 一〇 一〇
九月 一〇 一〇 一〇
十月 一〇 一〇 一〇
十一月 一〇 一〇 一〇
十二月 一〇 一〇 一〇
計 一一 一一 一一
平均 九・二 九・二 九・二

●廿五年度行事豫定及實施方針
大綱は昨年度と大差なし（記載
省略。然し會員増加と支部新設
により、會務がいよゝ激増發展
することは當然で、ウェストン祭
の如き恒例行事も諸般の點から檢
討考究されなければならぬし、
豫定以外の問題の發生することも
考えられる。

特に東京支部即ち東京都山岳會
が、從來、本部に從屬的存在であ
つたのを、今後は努めて獨自の立
場で充分活動運營し得るよう、種
々手段方法を考究した。

●廿四年度會計報告
○收入の部
入會金 四九、七〇四
會費（廿四年度） 一九九、一〇〇

× × ×

(含東京支部維持費百圓)

〃 (舊年度) 二〇、一三〇〇
會報廣告料 一三、六〇〇
正章略章代 一、九四一
貸室料(ルーム) 四、六〇〇
宿泊料(ルーム) 一、三〇〇
基金受入 一、一三四四

計 三、一四、四一九

〇支出の部
人件費 一、一五、〇七〇
(主事、助手、國體應援者)

謝禮 七、九〇〇

會報費 四、六八七五

郵報費 六、一七四一

(會報發送、諸通知一切)
消耗品費 三、六五九五

(事務用品、電球、木炭、茶等
ルーム用品を含む)
備品費 一、七、一三五

(事務用椅子二、窓掛、書架、
厨籠、ゴム印等)
交通費 九、三一二

製本費 七、四八〇

香典及見舞金 一、四五〇

夕食代 四、五〇五

(小集會講師夕食、アルバイト
者の夕食)
圖書室維持費 二〇、三六五

(光熱、芝生手入、夜具洗張)
正章略章内金 八、七〇〇

立替金償還(福井へ) 五、二三〇

ウェストン祭補助 二、八七五

計 三、四、五二三

差引不足 三〇、八一三

〇廿五年度會費増額(別記) 七、五

〇廿五年度豫算 三〇、〇〇〇

〇收入の部 三〇、〇〇〇

入會金 三〇、〇〇〇

(入會者百人として300圓×100)
會費 二〇、〇〇〇

(東京250圓×400=100,000
地方150圓×700=105,000)
廣告料 三〇、〇〇〇

(5,000圓×6回=30,000圓)
會員章賣上代 三、〇〇〇

(30圓×100=3,000圓)
貸室料 五、〇〇〇

宿泊料 一、〇〇〇
山岳代 一、六五、〇〇〇

計 四、六五、〇〇〇

〇支出の部
人件費 一、三三、〇〇〇

(7,000圓×12×1=84,000
4,000圓×12×1=48,000)
謝禮 六、〇〇〇

會報印刷 五、〇〇〇

(10,000圓×5回)
通信費 三、五〇〇

消耗品費 一、〇〇〇

備品費 一、〇〇〇

交通費 一、〇〇〇

夕食代 五、〇〇〇

圖書室維持費 一、五〇〇

正章略章代 五、〇〇〇
繰越金 一、〇〇〇

會費 二〇、〇〇〇

(東京250圓×400=100,000
地方150圓×700=105,000)
廣告料 三〇、〇〇〇

(5,000圓×6回=30,000圓)
會員章賣上代 三、〇〇〇

(30圓×100=3,000圓)
貸室料 五、〇〇〇

宿泊料 一、〇〇〇
山岳代 一、六五、〇〇〇

計 四、六五、〇〇〇

〇支出の部
人件費 一、三三、〇〇〇

(7,000圓×12×1=84,000
4,000圓×12×1=48,000)
謝禮 六、〇〇〇

會報印刷 五、〇〇〇

(10,000圓×5回)
通信費 三、五〇〇

消耗品費 一、〇〇〇

備品費 一、〇〇〇

交通費 一、〇〇〇

夕食代 五、〇〇〇

圖書室維持費 一、五〇〇

正章略章代 五、〇〇〇
繰越金 一、〇〇〇

山岳代 一、六五、〇〇〇

計 四、六五、〇〇〇

●役員改選の件(別記)
●支那報告(出席者のみ)

●關西 篠田支部長
六月五日 總會、於六甲山

●七日 小集會(岳人に發表)
十月卅日十一月三日 第四回

國民體育大會に、大阪府代表三名
技術役員三名派遣。
十一月十七日 冬山の講演及映

畫、於毎日講堂。
會報二號發行

水野渡菜送別小集會
會費數一七八名、退會者三八

名。
會費種別 農、輕工業(紡績
・双物) 從業員、新制高校、俸給

生活者) 會費増額の爲、退會者半數に及
ぶ見込なるも、之等は團體員とす

る。
第四回國體參加、藤島外三名。
三縣(新潟、福島、山形) 交歡

飯登登山、參加者六〇名。
總會、於魚沼三山、ついで科學

博物館佐竹博士指導の下に植物研
究。
高校連盟に指導者派遣。

女人禁制の光見山に、二〇〇名
の内、高校生四名、登山。
越後山岳三號(會報一四九號圖

書紹介に詳し) 刊行。
國立公園事務協力。
〇山陰 佐野支部長

創立日なお浅く特記事項なし。
六月 ウェストン祭五名參加。
七月 大山々開き。

八月 大山集團縦走。
九月 山と溪谷社主催座談會。
十一月 國體登山及公開登山に

佐野外十七名參加。
十二月 スキー映畫と講演會。
一月 會報一號發行。

二月 各山講習會。
來年國體に、豫算二五〇萬圓で
大山に山小屋建設豫定。

四月五日於米子市開催、觀光產
業博覽會に豫算一三萬圓で山小屋
模型建築、すでに落成。

〇山梨 岩間支部理事
役員及役員會 支部加盟各會より
二名宛理事選出、毎月一日及十

五日の二回理事會開會。
總會 於櫛形山 參加六〇名
六月 夏山講習、講師は本部支

部役員及先輩。
七月 講演ナンダコット、講師
本部堀田理事。

八月 於富士 國體豫習、於洞
澤及龍谷夏山合宿訓練。
九月 於北郡帶那山、體育祭、

參加二〇〇名。
十月卅日十一月三日 第四回
國體富士登山に支部長以下全員出

動、縣當局及本部と協力。
廿五年一月 於霧ヶ峯スキー講
習、六十名參加。

〇信濃 高橋支部委員
六月 ウェストン祭、本部に全
面的協力。

八月 乘鞍學術登山 地質を小
林、植物を横内各委員が指導。
十一月 國體に高橋外十名參加

登。高橋、百瀬外參加。
六月 部報三號刊行。
十一月 横支部長辭任し後任と

して尾崎就任。
十二月 部報四號刊行。
〇福島 川俣支部理事

川俣が常任理事に就任、會務處
理、本部連絡を一元化した。
廿五年一月 於吾妻小屋、初心

者の爲の冬山講習。
二月 藏王スキー登山 戦々よ
り雁戸一有耶那峠登山。
三月 國體スキーに協力。
〇東京 藤井支部理事長
四月 立山スキー登山
五月以來 研究シリーズとして
音楽・地質・氣象・植物などの小
集會を開催。
九月 國體豫選雲取登山 毎日
新聞及地元官公廳、諸團體、奥多
摩山岳會等の強力な後援の下に五
班約百廿名が集中登山に成功。
十月十一月 國體富士登山に
支部員その他より選出した代表九
名派遣。
廿五年一月 於飛騨坂上スキー
講習、地元官公廳、岐阜スキー連

盟後援により舉行、バッヂテスト
をも行った。
白馬スキー合宿 係村井支部理
事
二月 菅平スキー合宿 係今井
支部理事。
會報一號、二號發行。

〇富山 沼倉支部理事
一月 大品山 雪洞訓練。
四月 猫又、毛勝山雪洞による

七月 指導者講習會に講師派遣
五〇名參加。A組より黒部、B大
日。
九月 縣民體育大會、國體豫選山

行、上級級の岩登り、中級以下立
山行。
十月十一月 國體富士參加

(内女子一名)。
小屋經營、營林署の好意により
室堂の小屋經營、松ノ平も決定、
稱名・追分・地獄谷は支部指定と

し二割引と協定した。
●映畫(十六ミリ)
塚本園治氏作の日光紅葉譜(總

天然色)、銀山平より尾瀬へ、ス
キー一家を映寫した。

◆山小屋の會員割引◆
信濃支部の贈入りでかねて懸案
中の會員の山小屋宿泊料の割引が
今夏から實現しようとしている。

割引の實施される範圍は北アルプ
ス信州側の各山小屋及旅館の一部
で、會員は昭和二十五年度の會員
證及びパスチ提示の上利用された
い。詳細は追て發表の豫定。

★小島島主翁のレリーフ
故小島氏を永く記念するためル
ームの一角にレリーフ(會員佐藤

久一朗氏作)を取り付けける件は來
る六月十日午後關係有志によつて
取り行はれる豫定である。

會務報告

(一) 本部役員會

三月八日 連絡理事會
神戸博にアルバータ記念ビッケル出品の件は、再協議の結果承諾と決定。
會員總會の報告事項・議題を作成。松方外十一名出席
三月十五日 連絡理事會

富士講習計畫 静岡支部創立紀念事業として、今秋開催の第五回國民體育大會に際し、静岡縣側より、初冬の富士登山講習會を舉行する計畫を、同支部鹽田、磯野兩委員から提案があつて審議した。

(一) 構想 縣教育委員會承認の下に國體終了に引續き、參加府縣代表及一般參加者を對象として、初冬の富士登山の講習會を行う。

(二) 場所 御殿場若しくは須走口。

(三) 實施分擔 本會主催として全面的に企畫實施し、技術役員を派遣する。事務は實施要綱に基いて主として支部が行う。

(四) 役員 庶務十名、技術廿名計約卅名として、所要經費は別途に豫算を計上する。

(五) 豫算 概算十五萬圓

(六) 小屋新築計畫 本行事を機に、冬期用の小屋を建設する。相當巨額の經費を要するので、具體的な設計案數種作成の上、検討する。

會員總會事項新役員推薦交渉のことその他。

小集會事項 四月(二〇回)未定、五月(二一回)は木暮氏を偲ふとする。

ウェストン祭事項 開催の時期について考究することとした。
堀田外六名、静岡支部鹽田、磯野出席。

三月廿二日 役員總會
本年度行事・講習會の種目協議役員新任の件 本部及東京支部の役員を詮衡、さらに評議員選出を決定、總會で理事をきめ、役員總會で評議員を決定するものとする。

會員總會事項 總會の議事及當日の擔任を決定。
廿四年度の講師派遣の件報告。松方外十四名出席。

三月廿五日 會員總會(別記)
四月五日 連絡理事會

第五回國體事項 事務局決定、四月廿三日 現地鈴鹿山麓湯ノ山に於ける協議會に、入澤・鈴木村山出席、現地に於ける一切は演習に一任と決定。

群馬支部設立準備の件 在高崎市吉田より群馬支部設立の申入があつたにつき協議。

山形支部發會 かねて在山形市後藤より協議のあつた支部設立準備完了し、四月廿九日發會式舉行の運びとなり、藤島・藤井・原を派遣に決定。

評議員入選 原案作成は藤島理事に一任することに決定。
ウェストン祭事項 本年は公開的行事とする方針の下に期間は七月上旬、細目は事業部と信濃支部と協議の上決定することとする。

松方理事長外九名出席。
四月十二日 連絡理事會

第五回國體現地協議會事項討議芙蓉莊(富士新設小屋)近況につき林より報告。内部若干修理を要する。

富士懇親登山計畫 五月三日より五日(芙蓉莊に於て)

月山スキー行(山形支部創立紀念山行)參加者入選。
四月十九日 役員總會

名譽會員決定 藤島理事より提案決定(別記)。
評議員決定 慎重に入選を行い決定(別記)。

本暮前會長追悼有志晚餐會 五月六日に未亡人及令嬢招待し圖書室で行うこと、世話人神谷・堀田その他ウェストン祭・山形支部・富士登山・事務分擔・第五回國體等多數の議題につき考究討議した。

四月廿九日 月山々麓津に於て山形支部創立報告。
四月卅日 月山頂上に於て山形支部發會式、本會より藤島外九名支部後藤外約卅名參加盛會裡に終了。

(一) 支部及地方連事終項
三月十二日 石川支部西川委員宿泊、會計及事務報告。

三月十六日 第五回國體三重役員川喜田來京事務連絡。
三月廿日 山梨支部 大澤支部長來京事務打合。

三月廿四日 鹿兒島岡田來京、同地支部設立につき協議。
三月廿五日 山陰支部 佐野支部長・港及鳥取縣西體育課長來京第六回國體事務打合。

三月廿六日 鶴岡山岳會 村上來京、同地在住會員狀況報告。
三月卅一日 關西支部 水野來京、近く渡英につき日程等報告。

アルパインクラブに對する連絡など打合。
四月三日 富山支部 貴堂支部長來京、新任挨拶。

四月十四日及廿七日 山梨支部大澤來京事務打合。
四月廿六日 關西支部 田中來京、近く渡米につき、岳界に對する連絡事項等打合。

五月二日 信濃支部高橋來京、ウェストン祭及事務全般打合。
五月七日 信濃支部小林來京、ウェストン祭打合。

本年度役員

會長 武田久吉(重任)
評議員 (四月十九日役員總會決定、二三名)

榎 有恒・神谷 恭・沼井鐵太郎・辻 莊一・藤島敏男・三田幸夫・津田周二・伊藤秀五郎・今西錦司・成瀬岩雄・島田 巽・山崎春雄・篠田軍治・入澤文明。

支部長在職者 藤島源太郎(越後)・伊藤彌十郎(福島)・大澤伊三郎(山梨)・後藤幹次(山形)・佐野勇一(山陰)・尾崎喜八(信濃)・貴堂武時(富山)・大室貞一郎(静岡)。

理事長 松方三郎(重任)
理事 (三月廿五日會員總會決定、一九名)

堀田彌一・谷口現吉・望月達夫・藤井運平・今井友之助・辰沼廣吉・林 和夫・關根吉郎・今村正二・神山 勉・濱野正男・千谷壯之助・崎田 熙・鈴木正俊・杉本義信・小野 幸・村山雅美・山田二郎・村木庸益。

監事 石原憲治・中屋健一
主事 原 全教

圖書整理報告

これは去年の十月から始めて、今日に至つてをりますが、なかなか思うようにはかどらず、やつと

和書の記入を終り、一應書棚に並べたような次第です。まだレベルの號の整理は半ばで、帶出思うにまかせません。至急和書だけの整理を了したく思います、それに續いて洋書を早く整理せねばなりません。寄贈希望圖書も次號からのせるつもりです。

これまでの事務は、大體、商大現役の澁谷一郎君の力を得て共に致してをります。(小野 幸)

第一一五回小集會

十二月十五日 於圖書室
會員新村正一氏から、積雪期の槍・穂高縦走の話聞く豫定であつたが、生憎肺炎の爲、出席できないとの電報に接し、林理事を中必として座談會を催した。山に關するあらゆる話題がで、まじめにしかもなかなか一夜であつた出席者 卅五名。

第一一六回小集會
廿五年一月十八日 於圖書室
講演 凍傷の話

會員 辰沼廣吉氏
慶應山岳部以來の豊富な多山の體験と、専門の醫家の立場であつた講演は極めて有益なものであつた。終つてから質疑應答があつた。質問者の中には、各學校現役の顔が見えたのもうなづけた。來會者四十七名。

第一一七回小集會(二月四日)
映畫 (八ミリ總天然色)

會員 別宮俊氏
滯歐滯米時代の作品、深碧の空にそより立つ岩峰の下には、名ガイド、ブラバンド一家のだんらんがかもされ、車窓に去來する南歐の都市があるかと思えば、スイ

スの湖畔の散策場面があり、變幻
つることなく、觀衆もまたたち
まちアルペンへの登高心に胸をと
きめかし、戰慄に今は亡き異國の
町への感傷にはや、胸の痛む思い
で、寒宵しんくとしみる冷氣も
よそに、終りの早いのを惜んだ。
なお、所蔵のヒマラヤ映畫も、
珍しいもので一同を喜ばせた。來
會者三五名。

會員通信

石狩 岳

藤島 敏男

會員小瀧武夫君の切なる勧誘に
近來トンと出かけぬ小生遂に重い
腰を上げ北海道へ参り候。札幌で
は山崎春雄先輩の宅へ轉りこみ、
毎日近郊の丘に雪上散歩を試み或
はストーブを圍んで、スイス・ア
ルプスの回想に話はコン／＼と泉
の如くつきず樂しき週日を過こし
申候、また北海道支部の集會に参
會、アルプスのスライドを映して
迎々しい話をも致候。また或る夜
は支部の委員達に國民體育大會が
北海道にて開催の場合登山部門を
いかにすべきかの討議なども拜聴
致候。

折角北海道まで参りたることな
ればとて北大山岳部のリーダーで
會員の山崎美雄君その他の先達を
得て石狩岳へ志し候。帯廣より十
勝三股まで参り、更らに幽遠なる
原生林を縫ふこと半日、岩間温泉
小舎に二泊し三月十二日、春にし
ては稍つめた風荒れる日、石狩
岳の頂上を踏み申候。石狩側はも
とより十勝側よりも天幕なしでは
登頂叶はざりし石狩岳に、不完全
とは申し乍らこの小舎のおかげで

樂々と登頂し得たる次第に候。
山頂は風雪のため眺望皆無に候
ひしも中腹以下見渡すかぎりの原
生林は忘れ得ぬ印象を與へ申候。
よき先達さへあらばまだ／＼高岳
に登れる自信を得たるも嬉しく存
候。

久振りに接したる北海道の冬の
自然にまたの遊行を期したること
に候が、昭和十年ヘルグエチャ・
ヒュッテに行を共にしたる會員田
中菅雄、田口一郎兩君が比島に瑞
西に逝きて返らぬ人となりたるを
淋しく追想したる次第に候。

阿蘇山下聖山莊

北田 正三

晩秋の九州の山々も霧氷で、美
しくなりました。十五日は久住山
で、はからずも、東京より武田先
生、村井よね氏、塚本閣治氏、原

氏、遠來の山人を迎え、地元より
は工藤氏、加藤氏、六鶴先生等も
参加、山の湯宿法華院では空前の
賑いでした。私は翌日工藤氏と下
山、諸氏は飯田高原へ向つて九州
の中央を心ゆくまで歩かれたでし
よう。

★お知らせ★

本會が昨秋國體登山記念として
當時の特別關係者に贈るべく會員
佐藤久一朗氏に囑したる記念品は
スイス、グリンデルワルドの名匠
アマツヘルの山靴を模して雅味掬
すべきものである。二三個を以て
この原型を減し去るに偲びないの
で同好の士に頒ちたいと思ふ。
世話人 楨・藤島・松方
一、用途 置物 花さし 灰落し
一、青銅製桐函入り
一、頒布價格 三〇〇〇圓
本會宛なるべく早く申込のこと

○片桐のザツクとテント

- 特 賣 ハイキング用ザツク ￥ 950.00
澤登岩登用 D式ハイザツク ￥ 950.00
○豫 約 ザイル 12 ミリ (檢定合格品)
六月初旬發賣豫定
20 メートル ￥ 1700.00
30 メートル ￥ 2550.00
○門田作 (ベルグハイル印) ビッケル
尺モノ ￥ 1800.00
尺1寸モノ ￥ 1900.00
尺2寸モノ ￥ 2030.00
○同 アイゼン (八本爪) ￥ 1800.00

- 優 秀 登 山 靴
○夏 期 用 テ ン ト 製作引受
○キスリングザツク

東京都文京區湯島天神町二ノ十九

(天神下電車通り)

片 桐 盛 之 助

山とスキー具

第六回國體登山開催豫定

大 山 國 立 公 園

山陰線米子驛下車、バスにて一時間、山腹の基地大山寺に至る。

旅館、宿坊、収容力 1000 名、宿料三食 300 圓。

其他 鐵道局山の家、大山山岳會ヒュッテ、郵便局、電信、電話
の施設完備。

日ノ丸バス米子支店

米子市東町驛前通り

大 山 觀 光 協 會

鳥取縣西伯郡大山村大山寺

日本山岳會山陰支部

鳥取縣米子市中町八一

中部山岳の展望と 鈴蘭の山

入笠小屋 (六月十日)
落成

中央線富士見驛下車三時間
日本山岳会員 高橋達郎經營

★入笠小屋 會員高橋達郎氏の手により建設、會員各位の利用をお薦めする。建坪一三十三坪、收容人員一ベツト十四、場所一入笠山

鎮打平(一七三〇米)、宿泊料一素泊一〇〇圓・二食付二〇〇圓(本會員は二割引)、建物構造一三階宿

泊室、一階喫茶室、風呂場。
★第四回國體當時作成した五萬分の一地圖左の通りルームで販賣してゐます。雲取山(二〇〇圓)・金

峰山瑞麟山・駒ヶ岳白根山・富士山(各二五圓)

★住所變更された時は必ず御通知下さい。會への通信には必ず會員番號記入、また會への問合せには返信用切手を同封して下さい。

★一九四一年一月に一〇一號の會報を出してから恰度一〇年目にあたる。途中に戦争がはいりたりして會報の體裁も紙張もいろいろ變つた。最近ではどうやら戦前の會報に近づいてきた。一〇一―一五〇號迄の總目錄も目下作成中故遠からず御届け出来ると思ふ。(M)

會員計報

泉谷駿一君(昭和十七年六月入會會員番號二一五八號、法政大學山岳部OB)昭和二十年二月十一日

ルソン島ラウニオン州ロザリオの戦闘にて戦死さる。(父君泉谷兵吉氏編「山彦」の寄贈あり)

水野 敏君(會員番號二二八八號)は昭和十四年七月八日、木曾駒奥三ノ澤單獨登山中遭難逝去された(名古屋山岳會跡部昌三氏報)

大石公堂君(昭和十七年六月入會會員番號二一六〇號)昭和十九年病死された。

藤田 肇君(昭和十五年三月入會會員番號一八一號)昭和廿年八月六日廣島にて行方不明、失踪宣告を受けた。

林松三郎君(會員番號二二一〇號)昭和廿年八月六日、於廣島戰災死。

本會は謹みて哀悼の意を表する

山と溪谷

精銳を誇る「尾瀬と日光」特集

133號 (6月號) 發賣中

《原色版表紙》燧が嶽……小山良修

燧が嶽より尾瀬沼の俯瞰……武田久吉

威風凛々な尾瀬が原の俯瞰……岡田紅陽

権巻頭 花吹く日光戦場が原……石川輝之

尾瀬が原の回顧と水害問題……武田久吉

※木暮理太郎氏記念碑建設※

※高頭仁兵衛氏壽像建設※

尾瀬沼原の泥炭地質……安齋徹

※尾瀬花譜……千原哲磨

☆奥日光花譜……矢島市郎

※メボソ鳴く(短歌)……平野長英

※會津駒登山(短歌)……川崎隆章

尾瀬座談會(於尾瀬小屋)……長藏小室

堂々二三頁、山岳座談會の歴史、現地山小屋主にきく興味浸々たる尾瀬の秘話と逸話

「グラフ」薫風の尾瀬へ……岡田紅陽

※小屋日記……平野長英

※尾瀬に寄す……橋本權藏

※尾瀬の山葡萄酒……(文)山村 榮

會津駒より尾瀬沼へ……(繪)佐々木啓祐

☆山の湯を語る……湯西川温泉……藤生武治

☆山と溪谷創刊二十周年記念・山の唄作曲發表

行 南日光の静境・社山……田中新平

紀 日光表連峰縱走……原 全敬

栗山郷・秋の旅……川崎隆章

四十年前の尾瀬沼の思い出(繪と文)赤城泰彦

☆奥日光略圖(二頁大特別附録)

☆山の音楽と映畫の會(於三月三日夕讀會ホール)

本號を御持者に本社で招待巻を贈呈致します

二十周年記念出版

戦後最高を誇る山岳寫眞集に田部、武田、冠、横、松方、村井、黒田、藤木、中西、猪谷の諸權威の隨想を附す。七月上旬刊、價八〇〇圓、書留送料六五圓(前金申込者は價七〇〇圓に割引)

日本の山々 塚本閻治著

(定價1部6)圓 千6圓 年極720.00)

東京都中央區銀座八丁目出雲ビル内

株式會社

山と溪谷社

電話(銀座) 6473 番
振替 (東京) 60249番